東ティモール初の「博士」に

岐阜大院留学生

日本との橋渡し役めざす

東南アジアの小国、東ティモールから日本に来て学ぶ留学生で、初の「博士」が誕生する。岐阜大学大学院工学研究科のカンシオ・モンテイロさん(33)は同大で5年半学び、3月に博士後期課程を修了。4月から母国の大学で教壇に立つ。「まだ発展途上の国造りを担う人材を育てながら、日本との橋渡し役になりたい」と夢を膨らませている。

2月13日、岐阜市の岐阜大工学部で開いた東ティモールの大学生訪日団との交流会。カンシオさんは電気電子・情報工学科の講義、自身の研究テーマの「暗号用の集積回路」について説明し、母国の学生から相次いだ質問に笑顔で答えた。

2002年にインドネシアから独立した東ティモールは、国土が岩手県とほぼ同じ面積で、人口は約118万人。政情や治安は安定してきたが、教育体制の整備が遅れている。岐阜大は03年から東ティモール大学に教員を派遣して現地の教官や学生を指導。06年からの国際協力機構(JICA)の東ティモール大学支援事業にも協力している。

カンシオさんは東ティモール大を卒業後、09年10月に岐阜大の研究生として来日。早速、立ちふさがったのが言葉の壁だった。修士課程では、すべて日本語の講義に悪戦苦闘。入浴時間などが細かく決められた不自由な寮生活も経験した。

それでも「岐阜は空気や街がきれいで、みんな親切にしてくれる」と地域に溶け込んでいった。博士課程に進んだ12年にリリーさん(34)と結婚。岐阜で2歳と1歳の2男の子宝にも恵まれた。週末に家族でショッピングセンターに行くのが楽しみのひとつだ。

指導教員の高橋康宏准教授(37)は「カンシオさんは5年半、頑張った。現地の産業は未発達で、彼の研究はすぐにはビジネスに結びつかないが、多くの人材を育ててほしい」と話す。

カンシオさんは4月から、母校の大学の工学部電気電子工学科で講師を務める。「まず学生と教官のコミュニケーションを良くするシステムを作りたい」と抱負を語る。元東ティモール大使で、日本東ティモール協会会長の北原巌男さん(67)は「国造りは人づくり。学位を生かして活躍してもらい、後に続く若者の目標になる存在になってほしい」と期待を寄せる。

カンシオさんは、日本での思い出を詰め込んだ1枚の地図を作った。「ビジネス旅行と観光」と題した日本地図は訪れた都市にマークを入れ、「日本の食べ物はみんなおいしい」と刺し身や博多ラーメン、温泉などの写真を載せた。「チャンスがあれば、東ティモールと日本のパイプ役になる仕事をして、また日本で暮らしてみたい」。精悍(せいかん)な顔つきが一瞬、やわらいだ。

訪日した東ティモールの大学生に研究内容を説明するカンシオさん(岐阜市の岐阜大学)

2015年3月6日 日経(夕刊) 中部3県版